

コミュニケーション学部報 (2013 年度)

1. 専任教員

教授

有山輝雄
安藤明之
池宮正才
内田平
荻内勝之
川井良介
川浦康至 (学部長)
駒橋恵子
桜井哲夫
佐藤行那
柴内康文
関沢英彦
中村嗣郎
西垣通
長谷川倫子
本橋哲也
山崎カヲル
山田晴通
吉井博明
渡辺潤

准教授

遠藤愛
大榎淳
北山聡 (教務主任)

佐々木裕一
深山直子
ピーター・ロス

専任講師

北村智
光岡寿郎

2. 客員教授

近藤等則
春風亭柳橋

3. 特任講師

草野ハベル清子

4. 非常勤講師

エバノフ恵智子
遠藤大輔
大谷安宏
河原啓子
現影秀昭
小出裕子
佐々木良輔
鈴木麻利子
曾根和子
崔文姫
ジョン・マクグラス
松本健太郎
三橋順子
山家誠一
吉岡真弓
吉田達

5. 退任

有山輝雄 (ありやま・てるお) 1943年, 神奈川県生まれ。1967年, 東京大学文学部国史学科卒業, 1972年, 同大学院社会学研究科社会学Bコース博士課程単位取得退学。日本新聞協会, 桃山学院大学社会学部, 成城大学文芸

コミュニケーション学部報 (2013 年度)

学部を経て、2002 年、東京経済大学コミュニケーション学部教授。コミュニケーション学研究科委員長 (2004 年度～2007 年度)。2008 年度、国内研究員。主要著書に『徳富蘇峰と国民新聞』『近代日本ジャーナリズムの構造』『甲子園野球と日本人』『戦後史のなかの憲法とジャーナリズム』『海外観光旅行の誕生』『陸羯南』『「中立」新聞の形成』『近代日本のメディアと地域社会』『情報覇権と帝国日本』がある。主な担当科目は「コミュニケーション史」「ジャーナリズム論」。

安藤明之 (あんどう・あきゆき) 1944 年、東京都生まれ。1966 年、日本大学商学部商業学科卒業、東京都立科学技術大学大学院システム工学研究科博士課程修了。高校教諭、愛知学泉大学を経て、1994 年、東京経済大学経営学部助教授。1995 年、コミュニケーション学部助教授、1998 年教授。国外長期研究員 (2000 年度～2001 年度)。学生委員長 (2006 年度)、コミュニケーション学部長 (2007 年度～2010 年度)。対外経済貿易大学派遣交換教員 (2011 年 4 月～7 月)。主要著書に『C 言語標準テキスト』『Visual Basic 標準テキスト』『情報処理概論三訂版』『情報システムとネットワーク』『初級シスアド受験対策』『Java 標準テキスト』『社会調査入門』『社会調査・アンケート調査とデータ解析』『IT パスポート試験合格テキスト』『最新情報処理概論』『ファーストステップ IT パスポート試験』がある。主な担当科目は「社会調査法」「情報とコンピュータ」「情報科指導法」。

内田 平 (うちだ・たいら) 1956 年、東京都生まれ。1979 年、上智大学外国語学部英語学科卒業、1985 年、同大学院外国語学研究科言語学専攻博士課程単位取得。同年、東京経済大学経営学部専任講師。国外長期研究員 (1989 年度～1990 年度)、1995 年、コミュニケーション学部助教授、2004 年、教授。コミュニケーション学部長 (2005 年度)。主な翻訳に N. Chomsky 「派生と表示の経済性に関する覚書」(『認知科学の発展』第 2 巻所収)、論文に On the lexical properties of the Japanese “Reciprocal” affixal verb -aw (*Studies in English Linguistics* 所収) がある。主な担当科目は「英語ワークショップ」。

荻内勝之 (おぎうち・かつゆき) 1943 年、ハルビン生まれ。1966 年、神戸市外国語大学外国語学部イスパニア学科卒業、1967 年、バルセロナ大学文学部イスパニア研究科卒業、1970 年、神戸市外国語大学大学イスパニア学専攻科修士課程修了。同年、東京経済大学経営学部専任講師。国外長期研究員 (1980 年度)。1983 年、経営学部専任講師、1984 年、助教授。1989 年、経済学部教授、1991 年、経営学部教授。国内研究員 (1992 年度)。1995 年、コミュニケーション学部教授。国内研究員 (2011 年度)。主要著書に『ドン・キホーテの食卓』『スペイン・ラプソディ』『おっ父ったんが行く』『ドン・キホーテ』がある。主な担当科目は「スペイン語」「異文化コミュニケーション」。

佐藤行那 (さとう・ゆきとも) 1943 年生まれ。1967 年、東京教育大学体育学部卒業。同年、東京経済大学経営学部助手、1972 年、同

専任講師。1975年、経済学部専任講師、1983年、助教授、1990年、教授。1995年、コミュニケーション学部教授。主要共著書に『学生のための健康と体力』がある。主な担当科目は「スポーツ」「健康の科学」。

山崎カヲル（やまさき・かをる）1943年生まれ。1966年、慶應義塾大学経済学部経済学科卒業、1968年、法政大学大学院社会科学研究所経済学専攻修士課程修了、1970年、博士課程退学。産業材料研究所、化学経済研究所を経て、1973年、東京経済大学経済学部専任講師。1977年度、国外長期研究員。1982年、助教授。1995年、コミュニケーション学部教授。国外短期研究員（2001年7月～9月）。コミュニケーション学部長（2003年度～2004年度、2006年度）。主要共著書に『広告の記号論』がある。主な担当科目は「身体表現ワークショップ」「比較文化論」「映画文化論」。

吉井博明（よしい・ひろあき）1943年、埼玉県生まれ。1966年、東京工業大学理工学部物理学科卒業、1968年、同大学院理工学研究科物理学専攻修士課程修了、1971年、博士課程を単位取得退学。日本学術振興会奨励研究員、未来工学研究所、文教大学情報学部を経て、1999年、東京経済大学コミュニケーション学部教授。研究委員長（2002年度～2003年度）、2005年度、国内研究員。コミュニケーション学研究科委員長（2007年度）、図書館長（2008年度～2009年度）。主要著書に『都市防災』『情報化と現代社会』『情報のエコロジー』がある。主な担当科目は「情報社会論」「情報生活論」。

6. 退任者に贈る言葉

有山輝雄先生へ

長谷川倫子

有山輝雄先生は東京大学大学院社会学研究課博士課程、東京大学新聞研究所の助手を経て、1976年から桃山学院大学社会学部助教授として大学教員のキャリアをスタートされた。その後成城大学を経て、本学には2002年に教授として、コミュニケーション学部にご着任された。

学部の講義では「コミュニケーション史」、「メディア・コミュニケーション論入門」、「特別講義マスメディアの現場から」など、2004年から2009年までコミュニケーション学部におかれていた「メディア社会専攻」の中心的な科目を担当された。2002年から2003年にかけてメディア社会専攻のカリキュラムの立案で一緒にさせていただいた折には、学生それぞれに最もふさわしい学びの場を提供することで能力をひき出すのが教員のつとめであるという先生の信念を反映した細かな配慮あふれるご意見をたくさん下さり、そんな先生からは、教育者としてのあるべき姿を学ばせていただいたように思っている。

また、先生が講義でお話になる内容は、ご専門のメディア史やジャーナリズム、マス・コミュニケーション研究の分野にとどまらず、幅広く、知的センスと楽しいエピソードにあふれ、学内での社会人向け講座においても多くの聴講生を魅了するものであった。その圧倒されそうな研究業績から、有山先生は学究肌で学問一辺倒なのではというイメージを持たれがちであるが、いつも学生のことを思い、暖かい眼差しをもって学生と接していらした様子を何度も目に

した。とりわけ演習の学生たちには、そのキャリア形成や就活へのコミュニケーション能力向上にも格段の配慮をなさり、学生たちの将来をいつも気にかけていらしたように思う。

2004 年から 2006 年にかけてはコミュニケーション学研究科委員長として、研究者を志す学生たちや第二の人生を学学生活に見出そうとするシニア大学院生たちの指導に尽力された。本学の大学院からは内外の大学で教職についている卒業生を多く輩出しているが、このような成果が見られるのも、有山先生が心血を注がれたコミュニケーション学研究科の環境整備に負うところは大きいだろう。有山先生の 2002 年の本学へのご着任は、香内三郎先生、田村紀雄先生に有山先生が加わることで、日本のメディア史研究の大御所 3 名が同時にお名前を連ねるといふ、いかなる大学にも実現できなかったファカルティの構成を本学が可能にしたことも意味していた。

とりわけそれを実感させられたのは、毎年 9 月に行う修士論文計画発表会であった。それぞれの院生を前にして、ビッグスリーからの貴重なコメントのシャワーは、ファカルティの一教員としてではなく、もう一度院生に戻ってこのお三方からのご指導を受けてみたいとまで思うほどで、このようなコミュニティの末席に加えていただけたことは光栄であった。この度の有山先生のご定年は、本学のコミュニケーション学研究科においても、一つの大きな区切りであると実感させられている。

2005 年からの 2 年間は、日本マス・コミュニケーション学会の会長に就任された。その学会本部事務局が、本学の第一研究センターの 2 階に設置されることになり、学会運営をお手伝

いていた院生たちでにぎわっていたのも先生との懐かしい思い出のひとつである。

また 2004 年には、東京経済大学プロジェクト研究所制度にもとづき国際メディア・コミュニケーション研究所 (CIMS: Center for International Communication Studies) の設置に尽力された。これは、研究目的を同じくするメンバーでプロジェクト研究所を立ち上げたもので、外部資金導入によって本学の研究活動の活発化を図ることを意図して設けられた本学の制度に、有山先生とコミュニケーション学部有志の教員で手をあげたものであった。

CIMS では 2005 年度には日本に在住する海外の報道機関の特派員への調査を実施し、また 2007 年度と 2008 年度には財団法人新聞通信調査会からの資金援助をいただき、日本から発信された情報の最終的な到達点、すなわち日本発の記事をそれぞれの国内の読者に伝えた海外の報道機関への聞き書き調査も実施した。初年度に外国の新聞の内容分析を分担した多数の院生たちを、ロンドン、北京、ソウル、ジャカルタなどへとインタビューに送り込むことができたのは、資金援助のために東奔西走してくださった有山所長のご尽力によるものであった。

最後に、先生が本学に就任された 2002 年以降に発表されたおもな著書を紹介しよう。『海外旅行の誕生』(吉川弘文館、2002 年)、『陸羯南』(吉川弘文館、2007 年)、『「中立」新聞の形成』(世界思想社、2008 年)、『近代日本のメディアと地域社会』(吉川弘文館、2009 年)、『情報派遣と帝国日本』上・下 (吉川弘文館、2014 年)。

有山先生、ありがとうございました。先生のますますのご健筆とご健康をお祈りし、今後と

もご指導、ご鞭撻をいただけますよう心よりお願い申し上げます。

安藤明之先生へ

川浦康至

安藤さんとは9年間ご一緒しました。私は安藤さんのあとをなぞるように、学生委員長と学部長を経験してきました。何かあると、「安藤先生だったらどうされただろう」と、当時の采配ぶりを思い出しながら、これまでなんとかこなしてきました。教授会での舵取り、そして大学執行部とのやりとりはいずれもひょうひょうとしていて、それは見事でした。もとより真似するのは容易なことではありません。しかし、それでも私にとっては羅針盤のような存在でした。

安藤さんと言えば、あのマリオ似の豊かな口髭。そして、ソフトハットにトレンチコート。お洒落な先生が仕事を終えて、少し疲れて帰る後ろ姿が印象に残っています。学部長に就いて知ったのですが、学部長の授業ノルマは1コマでよかったのです。それにもかかわらず、安藤さんは、変わることなく、数コマもの授業を担当されていました。私たちは、体調を崩されなにか、いつも気がかりでした。ですから、ときどきウトウトされている姿をお見かけすると、むしろほっとしたものです。

学部生や大学院生に親身な対応をされていたことも印象に残っています。研究室にお邪魔すると、まるで学生室のような雰囲気でしたし、一緒に帰る姿もよくお見かけしました。

安藤さん、20年間ありがとうございました。あと2年、安藤さんを羅針盤にコミュニケーション学部号を航行していきます。

内田 平先生へ

中村嗣郎

今年2014年3月、言語学者であるチョムスキー教授が来日し、上智大学で講演をおこなった。チョムスキー教授は1987年にも同大学で連続セミナーをおこなっており、その当時、私は大学院生であり、一般講演の準備の手伝いをするようになった。その時、内田平先輩が先頭に立ち、私たち院生を仕切っていた。的確に指示を出すその姿が今でも鮮明に残っている。

内田さんは私が大学院に入った時にはすでに東京経済大学に勤めており、本学を知ったのは内田さんを通じてであった。太田朗先生の授業には内田さん以外にも課程を修了した諸先輩方が出席しており、私はそうした恵まれた環境の中、言語学に魅せられていくことになった。

その後、私も東経大に勤めることになったが、そこにはいつも内田さんがおり、安心した中で働くことができた。実は、私の東経大における初日（の歓迎会に）内田さんの姿がなくさびしい思いをしたのだが、それはコミュニケーション学部開設のため他の先生と海外視察に行っていたからであった。

数年後、コミュニケーション学部ができ、内田さんと私はそこで働くこととなった。週2回の英語授業、習熟度別クラス分けなど、今では当たり前のことをいち早く取り入れた。予算がついていなかったのも、自前のテストを手作業で採点したことを思い出す。そのため、新任教職員歓迎会に出席できないこともあった。

内田さんは誰からも愛される人間である。それは内田さんがすべての人に対して分け隔てなく真摯に接するからだと思う。そして、コミュニケーション学部のために内田さんは研究や私

生活の多くを犠牲にしてきた。内田さんが教務主任や学部長を務めるようになってから話をする機会があまり取れなくなったが、それでも一緒に昼を食べに大学を出て話をするのは私にとってとても楽しいひと時であった。

内田さんが退職することになってから私の心の中にはぽっかりと穴が開いてしまった。この穴はこの先も埋まることがないだろうが、内田さんは私にとって模範となる人間であったし、これからもそうであり続けるだろう。私のような邪悪な心の持ち主はどうすれば内田さんのようにピュアな心を持てるのか、いつも考えさせられる。

チョムスキー教授の講演はネットで公開されることになり、私が知る前にそれを知らせてくれたのは内田さんであった。そうした気遣いが内田さんである。私は内田さんと一緒に職場で仕事ができ、そこでたくさんのことを学び、幸せであった。これからは内田さんが今までよりも自分のために時間を費やしてほしいと思う。そして、私が時々出すメールに合間を見つけて返事をいただきたいと思う。

萩内勝之先生へ

桜井哲夫

萩内先生（萩内さんと呼ばせてもらいます）、40年を超える大学教員としての仕事を終えられ、ご苦労様と声をかけさせていただきます。萩内さんとは、私がこの大学の経済学部にて専任講師（理論社会学担当）として赴任した1981年4月以来、33年にもなる長い付き合いでした。研究室が隣同士という偶然から、新米教員の私にいろいろと声をかけてもらい、お世話になりました。

最初に私的にお世話になったのは、私の新婚旅行（1983年12月）の際でした。年末に結婚してスペインに新婚旅行することになり、マドリード在住の萩内さんの知人にあれこれと依頼してもらい、滞在中は、その人の世話になりっぱなしでした。どこのレストランに行け、とかフラメンコはここで、この時間帯じゃなきャダメだとか、細かい情報をくまなく教えてもらったのは、今でもいい思い出です。新婚旅行以来、私の妻も萩内ファンでした。1988年、在外研究でパリに滞在していた時には、幼い娘と妻と三人で、マドリードの萩内宅にお邪魔し、あちこちの知人たちとワインを酌みかわしたものでした。

家族ぐるみでつきあってきたと言ってもいいでしょう。近年では、萩内さんと飲むときは、勤めている娘が来られるときは娘を呼んで三人で居酒屋で飲んでおります。娘もオランダ留学中に、スペイン旅行をした際、マドリードの萩内宅に泊めてもらい、それ以来、萩内さんの大ファンとなりました。学内では、視聴覚機器管理運営委員会（現・メディア委員会）をたちあげたときに、萩内さんが委員長、私が副委員長なのでこぼこコンビで、学内の視聴覚施設整備をしたこともいい思い出です。

外部から人を呼んできて、演奏会を行う文化企画というものがあり、その中心にいたのも萩内さんでした。幅広い人脈（ミステリー作家の逢坂剛、時代小説の佐伯泰英、歌手の都はるみ、島倉千代子、ギタリストの村治佳織、演劇の蜷川幸雄、歌舞伎の松本幸四郎一家など）の持主で、どうしてこういう人たちとつながりがあるのか、という驚きの連続でした。最近では、俳優の仲代達矢が、萩内訳の「ドン・キホーテ」

(新潮社)に惚れ込み、全国で萩内訳に基づく「ドン・キホーテ」演劇公演を行い、萩内さんと対談したりしました。

フラメンコやギターの世界では、日本では萩内さんの名前を知らないプロは誰もいないでしょう。それほどの有名人です。フラメンコの歌手と言えば、今ではスペインの至宝(人間国宝)と言われる歌手アグヘータを連れてきて、大学で演奏会を開いたのは有名です。アグヘータが来るというので、都内のフラメンコ関係者は仰天してかけつけてきました。半分スペイン人か、と言われているように、1年のうち1/3は、スペインにいたような気がします(笑)。スペイン国内の日本人(大使館関係を含む)の間で萩内さんを知らないひとは誰もいないでしょう。スペインでも、あちこちの大学に知人友人がおり、各地で講義や講演もしています。この大学の寛容さが、萩内さんという天衣無縫な存在を許してきたのかもしれませんが。

萩内さん、長いおつとめ(なんだかムシヨ暮らしたみたいいな表現ですが(笑))、ご苦勞様でした。

佐藤行那先生へ

池宮正才

佐藤行那先生に初めてお目にかかったのは、コミュニケーション学部発足メンバーとして私が本学に赴任した1995年4月のことであった。その時すでに、先生は在職三十年弱のキャリアをもつ大先輩であった。先生はつねに穏やかで温かく、颯爽としたダンディであった。

佐藤先生は武道家である。1967年、東京教育大学(現筑波大学)体育学部を卒業と同時に助手として本学に着任された。周辺の方々から

伝え聞くとところによれば、先生の柔道は「猛烈に強かった」そうである。

先生は武道家であると同時にすぐれた教育者である。正課の体育授業および正課外のクラブ・サークルの教育指導を通じて、先生はおびただしい数の学生を育てあげた。先生が顧問・監督を務めたクラブ、サークルは、柔道部、葵竹会、フリスビー、ポップコーンなど多岐にわたる。

私が佐藤先生の教育力に気付かされたのは、ポップコーンに所属するゼミ生と接したときであった。ポップコーンは1994年に結成された本学初のチアリーダーである。95年以後はコミュニケーション学部の女子学生が数多く参加し、男ばかりの東経大といった本学のイメージを刷新する役割を果たした。私のゼミにはポップコーンに所属する女子学生が何名も在籍していたが、いずれの学生も優秀で猛烈に活動的であった。キャプテンを務めていたAさんは、なぜか東大のスポーツ・サークルのリーダーを兼務しており、東経大と東大を行き来して平然としていた。尋常ならざる運動量とリーダーシップの力量である。ブータンの国民総幸福量に強い関心をもったキャプテンのBさんは、4年生になるとサッサと就職を決め一人でブータンに行ってしまった。ブータンにおけるフィールドワークの結果は、優れた卒業制作ルポルタージュ『ブータン紀行』として纏められた。

ポップコーンの女子学生たちが体現するこのような「心身の底力」は、佐藤先生によって導かれ育まれたものである。私などには到底不可能なやり方で学生の心身を鍛える先生の教育者としてのお力に、畏敬の念を覚える次第である。

佐藤先生。この度は定年退職おめでとうござ

います。これまでいろいろとお世話になりました。心から感謝しております。今後もどうかお健やかに、豊かな日々をお過ごしください。

山崎カヲル先生へ

大榎 淳

学生時代、私の狭い見識でも、東経大と言えば、数多の論客の一人に山崎カヲルを覚えていた。ただ、その名が初めて身近となったのは、サバティカル先のメキシコから帰国したの、井上輝子さん(女性学)の授業だった。社会学のはずが、聞かされたのは土産話で、それも随所に「ヤマサキさん」が登場する。ちょうど、彼女と入れ替わりに、山崎さんが彼の地に滞在していたのだ。その後、故・針生一郎さん(美術・文芸批評家)の指示で国際会議を手伝った折、パーティの席上、各国の参加者とともに、勢いよく肩を組んでインターナショナルを歌う姿を拝見したのが、はじめての生ヤマサキ体験である。

それがどういう経緯か、学部長と教務主任という関係で仕事をできるようになるとは、思ってもいないことである。とくに、文科省のコンペで、最終プレゼンまで残った時には、二人で「今さら夏休みの宿題で苦しむとは」と語りあったが、過ぎ去った思い出は楽しいばかり。ただこの話、関係者諸氏からは、原稿の遅延消失? が常だった山崎さんとは思えない!! という反応で、未だにネタとして通用する。(東京経済大学教職員組合機関誌「輪」第208号より転載)

吉井博明先生へ

渡辺 潤

吉井さんと僕は、東京経済大学に1999年度と一緒に赴任しました。コミュニケーション学部が完成年度に達し、大学院修士課程を開設するために、その文部科学省に申請するメンバーとして誘われたのでした。

最初にお会いしたのは入学式の日で、今でもよく覚えています。就任式があり、大学についての事務方からのさまざまな説明を一緒に聞きました。その後入学式に出たのですが、教員の席には新任以外の人たちが少なく、「出なくてもいいんですね」といったことばを交わしました。東経大が教員の行動をあまり縛らないこと、研究費や国内・国外研究等々の条件がきわめて恵まれていることなどを、お互いに話してほっとした記憶があります。

とは言え、大学院開設時のスタッフとして招かれましたから、その負担は想像以上のものでした。定員が20名で、実際にはそれ以上の学生が入学して、それが数年続きましたから、僕も吉井さんも毎年4人、5人という学生を引き受けざるを得なかったのです。博士課程の新設の際にも、二人そろって文科省申請のスタッフになり、開設後には毎年、複数の学生を引き受け続けました。

吉井さんは東経大に赴任する前から、防災情報についての第一人者として、政府や地方自治体が作る審議会や委員会に関わってきました。2009年には防災体制の整備への貢献に対して、功労者として内閣総理大臣表彰を受けています。きわめてお忙しかったのだと思いますが、学内においても研究委員長、研究科委員長、図書館長といった重要な役職を歴任されてきました。その意味で、勤続期間が20年に満たないという理由で名誉教授を授けないのはきわめて残念

なことだと思います。

吉井さんは僕と違ってスーツがよく似合います。勤めはじめて間もない頃に、ゼミの学生から吉井先生はダンディで大学の先生らしいけど、渡辺先生はらしくないと言われました。それに応えて「吉井先生は防災情報や危機管理といった社会にとって役に立つ研究をしている人だから、あの格好が似合うけど、僕の研究分野はポピュラー音楽やスポーツだから、ジーンズでなければだめなんだ」と言い、吉井さんは堅気で僕はやくざだと言ったことを覚えています。

僕は2011年度に1年間だけ学部長を務めました。しかし、それはもともと吉井さんが教授会で選ばれてやるはずだったもので、健康上の理由で辞退されて、おはちが回ってきたものでした。社会の役に立たないことに興味を持って研究している者としては、大学という組織においても役に立たない人間であることを自認してきました。しかし、吉井さんの代役なら断るわけにはいかないと引き受けました。

吉井さんはおそらく、退職後もあちこちから請われて、重要な社会的役割を担われるのではないかと思います。頭が下がる思いですが、あまりご無理をせず、健康に気をつけ、趣味の釣りなどを楽しんで欲しいと思います。